

当館へはさまざまな質問や照会（レファレンス）が寄せられます。件数や内容は分野によって異なると思いますが、鳥類に関するものは、週に1～2件程度、電話や電子メールで問い合わせがあります。そのうち、よく寄せられるもの、興味深いものをいくつか紹介しましょう。

鳥のヒナを…

「スズメのヒナを拾いました」や「ツバメのヒナが巣から落ちていた」など、ヒナに関する問い合わせは、繁殖期にあたる春から初夏にかけて集中します。そして、最後には必ずといってよいほど、どうしたらよいのでしょうか、と聞かれます。

この場合、はじめにヒナの状態を尋ねます。羽毛が生えているのか、衰弱していないか、種名は分かるか、などです。そして、状況に応じて対処方法を教えます。

最も多いのは、巣立ったばかりの幼鳥を迷子と間違えて保護するケースです。ツバメやスズメなど高い場所に巣を作る鳥のヒナは、羽が全く生えていない丸裸の状態で生まれます。そして、羽が生えそろうかそろわないかの時期に巣立ち、親鳥と一緒にくらしします。この時期の幼鳥は、うまく飛ぶことができず、持久力もないため、道端でひと休みをしていることがあります。これを見つけた人は迷子になったのだ、と思い保護します。しかし、近くには親鳥がいて我が子を見守っており、この行為は「誘拐」以外の何物でもありません。そのため、拾った場所へすぐに戻すように伝えます。

しかし、対処に困るのは、生まれたばかりのヒナを拾った場合です。巣の場所が分かれば元に戻すように言えるのですが、巣が高いところにある、あるいは分からずに戻すことができない場合は、野

生動物を保護している動物園や保護施設を紹介します。中には、自分で育てたいという人もいますが、これは以下のような理由でやめるように伝えます。

野鳥のヒナは人間が考えている以上に多種多様なエサを、成長に合わせて、一日に何度となく親鳥からもらいます。巣立った後は、野生でくらすしていくために飛び方やエサのとり方、危険なものを、親から教えてもらい、親離れをします。しかし、人間は空を飛ぶことはできません。野外で上手なエサの探し方を教えることもできません。つまり、人間が親鳥と同じようにヒナを育てることは、不可能なのです。

鳥の巣が…

相談が多いのは、4月から5月にかけてです。「戸袋に鳥が巣を作ったのですがどうしたらよいでしょう」だとか「ツバメが玄関に巣を作ったのですが、フンを落として汚くなって困る」といった内容です（図1）。戸袋に巣を作られてしまうと、雨戸の開閉をやりづらくなり、博物館へと相談を寄せるようです。その場合、卵を産む前だったら戸袋の中の巣を撤去するように伝えます。そうすれば、他の場所へ移動し、再び、巣を作ることが多いからです。卵を産んでいた場合、卵を抱く約2週間、ヒナが巣立つまで約2週間、合計約4週間ほど我慢してもらえないかお願いします。

ただ、巣の下が汚れて困る、という相談にはこちらも困ってしまいます。ヒナは大きくなるにつれて、食欲が増し、フンの量も増えます。汚れ防止というのであれば、巣の下にビニール袋を敷くという簡単な方法を教えます。しかし、人間にフンがあたり困るという場合は、巣のすぐ下に土台のように段ボール紙をガ

ムテープなどで止め、フンの落下を防ぐ方法をお勧めしています。

鳥は人間にとって、最も身近な動物のひとつです。できるだけ摩擦が生じないように、鳥のくらしぶりを説明しながら、一緒にくらししていけるように理解をお願いしています。

ケガをしている鳥を…

「ケガをしている鳥を拾ったけれど、どうしましょう」という質問は、夏から冬にかけて多い傾向が見られます。おそらく、巣立ちをした幼鳥が窓ガラスにぶつかったり、エサを十分にとることができずに衰弱したりして保護されるのでしょう。

どうしようと尋ねられても、学芸員は動物の病気やケガを治療する専門家ではありません。また、電話ではケガの程度は判断できません。この場合、分かれば鳥の種名や出血の有無、衰弱の程度、質問された方の住所を尋ね、近くの野生動物を保護、治療する機関を紹介しています。神奈川県の場合、横浜市の動物園や県立の自然環境保全センターで傷病鳥獣の保護、治療を行っているので、一番近いところを紹介しています。県外の場合、その都道府県によって取り扱いの違いがあるので、居住地の野生動物担当部局に問い合わせるようお願いしています。

困るのは、何の連絡もなく傷病鳥獣を博物館へ直接持ち込まれることです。持ち込まれても治療はできませんので、保護施設へ連絡をとり引き取ってもらうことになります。しかし、自宅から博物館へ運び、さらに博物館から車で1時間以上もかかる保護施設まで運ぶとなると、この間に衰弱してしまいます。学芸員も



図1 抱卵中のツバメ：4月になると家の軒下に泥と枯れ草の茎などを混ぜ合わせてお椀型の巣を作る。ヒナが生まれると、巣の下はフンで真白になる。（小田原市）



図2 メジロの巣：シュロと細いビニールのひもを編み合わせて作られている。



図3 ヤマセミ：白と黒の鹿の子模様が特徴的な、カワセミの仲間。バードウォッチャーの間で人気が高い。撮影：重永明生（鹿児島県）

すぐに対応できるとは限りませんので、さらに時間がかかり、最悪の場合、死んでしまうこともあります。

ケガをしている鳥を一刻も早く治療しなければならない、というあせる気持ちはわかりますが、必ず電話などで事前に連絡をしてください。そうすれば、近くの施設を紹介することができ、最悪のケースは避けられるでしょう。

この鳥の種類は？

一年をとおして寄せられる質問です。「庭に巣を作った鳥は？」だとか「きれいな声で鳴いていた鳥はなんでしょう」といった、素朴な疑問を博物館に電話して聞いてみよう、というものです。これは、簡単なレファレンスだと思われがちですが、意外に難しい場合もあります。

まず、対象となる鳥の特徴や観察したときの状況を探ねます。くちばしの形、羽の色、大きさ、鳴き声の特徴、いつどこで見かけたか、などです。たいていは環境と季節、羽の色で種が特定できます。しかし、「河原にいたハトくらいの鳥は？」だとか、「公園で“ピールピョヨヨー”とさえずるのは？」といった質問には困ってしまいます。

鳥の大きさは見慣れていないと勘違いすることが多く、さえずりは人によって表現が違うためです。大きさの場合、話しているうちにハト大（全長約 35 cm）がセキレイ大（全長約 20 cm）へと縮小し、5 cm くらいの小鳥（日本にはこれくらい小さな鳥はいません）がスズメ大（全長約 14 cm）に変身することもあります。さえずりの場合、電話の向こうで鳴きまねをしてくれますが、分からないことが多く、いくつかそれらしい種を教え、羽の色や大きさが分かったら再び連絡をください、と伝えるようにしています。



図 4 ヤイロチョウ：最も見たい鳥に挙げられる鳥。派手な羽色だが、森の中では保護色になる。撮影：重永明生（鹿児島県）

巣と羽

繁殖が終わった後の巣の主を聞かれることもあります。巣の大きさや形状、巢材の種類、見かけた場所などを尋ね、いくつか出版されている巣の図鑑を頼りにレファレンスします。メジロのように特徴があるものでしたらすぐに分かるのですが（図 2）、大抵の場合は、いくつか候補種を挙げるに留まり、持ち主を特定するまで至りません。羽も同様です。オシドリやイチヨウ羽のように特徴があればよいのですが、大抵は茶色っぽい特徴のない 1 枚の羽を持ってきて、「これは何の羽ですか？」と聞いてきます。羽の図鑑を調べますが、ほとんどの場合、答えは「分かりません」です。

どうして…

小学生からの質問の中には、非常に答えにくいものもあります。「どうして鳥はきれいな声で鳴くのですか？」だとか「なぜ鳥は空を飛べるのですか？」といった、本当に素直な質問です。なるべく、子どもに分かるような表現を使って、かつ的確に答えよう、と思うのですが、なかなかうまくいきません。こういうとき、役に立つのが子ども向けの図鑑類です。これらには、必ずといってよいほど Q&A 集がまとめられています。それを参考にしたり、インターネットで検索したりしながら答えるときもあります。一番大変な、でも一番楽しいレファレンスです。

この鳥が見たい…

見たい鳥の 1 番は、ヤマセミ（図 3）、ついでカワセミやサンコウチョウ、アカショウビンなどです。このほか、ヤイロチョウ（図 4）やオオタカ、ヤンバルクイナ（図 5）、コミズクなどの問い合わせもありました。質問者は、多くの場合、「行って必ず見られる場所」を要求します。しかし、鳥は移動しますから、巣で卵を抱いている



図 5 ヤンバルクイナ：ヤイロチョウと同様、最も見たい鳥の一つに挙げられる。近年、生息環境の悪化や外来種の影響、交通事故などにより生息数は激減しているという報告がある。撮影：重永明生（沖縄県）

場合などを除き、一ヶ所にずっと留まっている、ということはありません。

たとえば、日本ではまれな冬鳥または旅鳥とされているコウノトリ（図 6）。この鳥は、飛翔力が強く、一日で数百 km も移動することも珍しくありません。ですから、昨日までいたのに、今朝見に行ったらいなくなっていた、ということも多々あります。この例は極端ですが、どの鳥でも、季節的な要因や攪乱が原因でいなくなることはよくあります。そのため、「この場所で必ず見られますよ」、とすることはできません。また、ヤイロチョウやクマタカなど希少種に関する生息情報は、人間による攪乱の影響が大きいため原則として教えることはしていません。

鳥に興味を持っている方へ

今まで紹介してきたように、博物館へ寄せられるレファレンスは、種の同定や確実な観察情報を求めるものが大部分を占めます。ある鳥の生態を知るための調査方法を相談したい、と寄せられたものはたったの 1 件で、生態を専門にしている者としてはさびしい思いをしています。

観察種数を増やすことは面白いですし、目当ての鳥を確実に観察したい、撮影したいという気持ちは良く分かります。また、鳥の種名を知りたいという好奇心を持つことも大事です。しかし、じっくりと腰を据えて観察するのも面白いことです。

ある程度、野鳥の種類がわかってきたら、次に、好きな鳥の生態をじっくりと観察してみませんか。今まで気づかなかったような、おもしろい行動を見ることができるかもしれません。また、その鳥の好きなエサや生息環境を発見し、観察や撮影に役に立てることもできるかもしれません。手始めに、冬鳥として渡来するカモなどいかがですか。ゆっくりと見ることができて楽しいですよ。



図 6 コウノトリ：昨年末、千葉県に渡来したときは、その姿を一目見ようと一日に 100 人以上のバードウォッチャーが集まった。（千葉県）